

北海で死刑判決を受けた男

—フランシスコ・デ・クエジャルの苦難—

岩 根 圀 和

1.

火船攻撃のあった翌日、これまでのプリマス沖、ワイト島沖、カレー沖とは比較にならないほどの熾烈な戦闘が交わされた。カレーとダンケルクの間の地名をとってグラブリーヌ沖の戦いと称される。このときビスケー艦隊の「マリア・ファン」665トンが集中砲火を浴びて後檣を折り、舵機を損傷して漂流を始めた。舵に僚船の策具が絡んだとの説もある。救助信号に応じてメディナ・シドニア公は、僚艦を送って乗員を移すよう指令を下したのだが、折からの豪雨と強風で作業が捗らず、275名を残したまま沈んでしまった。イギリスの砲撃で沈没した艦船はこの一艘だけになるだろう。これよりしばらく後にポルトガル艦隊の「サン・フェリペ」がニューポートとオーステンデの中間あたりで力尽き、搁座して航行不能となった。被弾による浸水が激しく、満身創痍となって潮流に流されていたが沈みはしなかったのである。この「サン・フェリペ」の救援を目指して激戦区へ突入した僚艦「サン・マテオ」も操船不能に陥り、やがてはオーステンデの向こうへ漂流してオランダに拿捕されてしまった。戦死者は合わせて500名を越えるが、その前にガレアサの旗艦「サン・ロレンソ」がカレー海岸に座礁してすでに200名近い犠牲者を出している。海軍卿ハワードが「アーク・ロイヤル」船上から、「女王陛下の艦隊は壮大にして強力であります。敵の羽をひとつつつむ

しってやります¹⁾」とバーリー卿ウィリアム・セシルへ報告しているのはこの日である。いかにも得意げに高揚した文面の戦況報告をウォルシンガムへも同時に送っているのを見れば、ハワードとしては確かな手応えを得ていたものと思われる。8月9日（新暦19日）のウォルシンガムへの書簡に再度「われわれは見事に敵の羽をむしってやりましたので²⁾」と記している。よほどこの表現が気に入ったのであろう。事実、鉄壁の守りを固めているスペイン艦隊に正面からぶつかってみてもとうてい勝算は望めない。比較的弱い小型の艦船や船脚の遅いウルカ船などをひとつづつ潰していくのがハワードやドレイクの戦術であった。それがここに来て始めて効果を発揮したのである。

その一方でスペインにうれしい虚報が飛び込んできた。仇敵ドレイクが片足を失って捕らえられ、イギリス艦船15艘が沈んだと言うのである。この日、ドレイクの「リベンジ」とスペインの総旗艦「サン・マルティン」が総力戦を演じたのは事実である。しかし包囲された「サン・マルティン」の救援に戦闘艦「サン・マルコス」や「サン・マテオ」そしてすぐ近くにいたガレアサ「スニガ」が駆けつけて事なきを得ている。この時のグラブリーヌの激戦を逃れ、強風の難を避けてハリッチへ入ったイギリス船からの報告であるが、残念ながらドレイクが片足を失うことも捕虜になることも実際にはなかったのである。それが証拠にこの日、ドレイクはウォルシンガムに「敵艦船を風下へ追いやったのでバルマ公とメディナ・シドニア公はここ数日、手を握ることはできないだろう³⁾」と「リベンジ」の甲板から誇らかに報告している。

イギリスはスペイン艦隊を撃滅する必要はなく、またそれだけの戦力もなかったが、敵をイギリス沿岸へ寄せつけずに上陸を阻み、ドレイクの言うとおりの風下へ追いやればよかったのである。文字通り風下へ追いやられたスペイン艦隊を待ち受けていたのは、ダンケルクからオーステ

ンデの沖合 15 キロばかりの位置に北東へ広がるゼーラントの岩礁であった。風は北西、追い風である。強い潮流に乗って艦隊はゼーラント方向へ流されていく。イギリス艦隊はオランダ艦隊と共同して危険地域の標識を操作しているに違いない。スペイン艦隊を岩礁に誘い込む作戦であろう。敵が追撃の帆を絞って近寄ろうとしないのはそのために違いない。海域を熟知しているパイロットがいないかぎり、艦船のことごとくが岩礁に乗り上げてしまうのは時間の問題である。風上にはイギリス艦隊がすでに追尾を停止してスペイン艦隊から半リーグ（約 2.4 k）の距離で座礁するのを待ちかまえている。各船に警告が発せられてはいても、ゼーラント方向への風と潮流に流されて為す術を知らず、水深は 8 ファゾム（x1.8 m）、7 ファゾムと刻々と数を減らし、ついには 10 メートルを切って今にもガレオン船の竜骨をこすらんばかりであった。「もっとも恐ろしい日であった。誰もが希望を失い、死を覚悟していた⁴⁾」と後にルイス・デ・ミランダがフェリペ 2 世へ報告している。ミランダの言葉によれば、奇跡的に風が正午すぎに南南西へ移って艦隊は北海方向へ危機を脱出することができたのだった。高気圧の移動による幸運であったが、スペイン人にはまさに神の奇跡と思えたのである。午後 11 時、スペイン艦隊は総旗艦のもとに集結して三日月型の戦闘隊形をとることができた。この後、スペイン艦隊は船上会議を経て衆議一決、北海を抜けてスコットランドからアイルランドを迂回して遥か 750 リーグ（3600 k）先のスペインへ帰還の途につくのである。

火薬と砲弾がほとんど底をついていたにもかかわらずイギリス艦隊は何食わぬ顔で追尾してくる。スペイン艦隊でも弾薬の払底は同様であったが、いまひとつ食糧と水の欠乏が深刻な問題となっていた。幾日かかるとも分からぬおよそ未知の海域へ乗り入れるに際して飲料水と食料の厳格な統制が下達された。大量の水を消費するばかりでいまや無用とな

ったラバと馬を 80 頭ばかり冷たい海へ投げ落としたのもこの時である。8 月 10 日（旧暦）、スペイン艦隊はドッガーの浅瀬（北緯 55 度 30 分）を通過した。まもなくニューカッスルの緯度に達する。南西の風が強いが午後には収まった。レカルデ提督の「サン・ファン」を中心とした後衛隊にハワードとドレイクの艦隊が接近する。メディナ・シドニア公は合図の信号弾を 3 発放ち、満帆で走っている船に帆を絞って速度を落とすように指令をだした。イギリス艦隊に対峙するには、鈍速の船が多い後衛レカルデ隊を待たねばならないのである。総旗艦を回頭してレカルデに合流させると同時にメディナ・シドニア公は、優速のガレアサ 3 艘を戦闘配置につけて精鋭艦 12 艘を横列させる陣形を取った。もとより攻撃する意図のないイギリス艦隊は、弾薬が払底しているのを悟られないためもあって、一発も放たずにそのまま離れていった。このあともイギリス艦隊は、北緯 55 度 13 分、ニューカッスルの東 30 リーグでスペイン艦隊を放尾するまで、接近して攻撃すると見せかけては回避していく子供の喧嘩のような行動を幾度か繰り返すことになるのだが、その最初の時、縮帆減速の命令を無視して編成を離れた船があった。ガレオン船「サン・ペドロ」530 トンとウルカ（運搬船）「サンタ・バルバラ」370 トンの 2 艘である。何らかの理由で先へ突出してしまったのか、それとも意図的に先へ出たのかそれはともかく、連絡船が横付けして総旗艦「サン・マルティン」への召喚を伝えてきた。このときすでにそれぞれの艦長ドン・クリストバル・デ・アビラとフランシスコ・デ・クエジャルの双方に縛り首の命令が総司令官から下されていたのである。

2.

リスボン出港時の緊張した雰囲気のもとにあって、総司令官メディナ・シドニア公からの指令書が乗員全員に読み聞かされ、水夫、兵員の

規律の徹底化が図られた。例えば喧嘩口論や賭博には厳罰が下されること、神に仕え、聖母、聖者に悪態をつかぬこと、毎朝の祈禱の励行、そして乗船まえには必ず告悔と聖体を拝領することなど、まるで神学校のピクニックのようだと後に揶揄される事項だが、そこに艦隊編成に関わる命令として、旗艦より先に投錨してはならない、また旗艦より先へ出てはならない、そして艦隊編成を乱してはならない、これに違反する者は厳罰に処するとも明記されている。とは言え今回のような撤退の混乱時に旗艦より先へ出たのはやむ得ない。しかし大砲を3発放って縮帆の合図を徹底したのにそれを無視して減速を怠り、あまつさえ本隊より2マイル(3.6k)も先へ出たのは持ち場を離れて編成を乱す重大な違反行為と見なされ、即、処刑の判決が下されたのである。これを聞いてクエジャルはあまりのことに「怒り心頭に発した」と述べている。彼にすればガレオン船「サン・ペドロ」の艦長として、多数の戦死者、負傷者を出しながらも常に最前線にふんばってフェリペ2世陛下に仕えてきた勇者としての自負がある。詳細を言えば、「サン・ペドロ」は八方からの砲弾で損傷が激しく、懸命に手を尽くしたけれど修理が及ばず、貫通孔からの浸水が止まらなかった。それだけ敵弾の飛来する激戦区にいた証拠であるが、そのせいもあって艦長クエジャルはここ10日間というものの満足に眠ることは愚か、束の間の休息をとることもままならず疲労困憊していたと言う。グラブリーヌの戦闘が終わって北海へ抜ける航路に入った気のゆるみからか、任務を怠って少し仮眠をとっていた。その間に航海士が艦長に無断で帆を張り、本隊より2マイルほど先へ船を進めてから帆を絞り、浸水部分の補修時間を稼ごうと考えたのだった。だがそのときにはもう遅かった。総旗艦からの伝令船が横付けしてきたのである。「サン・ペドロ」のさらに先には、理由ははっきりしないがウルカ船「サンタ・バルバラ」が突出していた。

クエジャルがなおも驚いたのは、減速の命令を無視して編成を乱した罪に加えて、戦闘時において卑劣にも臆病なる振る舞いに及んだと訴えられていたことであった。命がけで陛下に奉仕している忠実なる臣下にたいして途方もない侮辱であると、クエジャルは猛然と反発し、「サン・ペドロ」の乗員で私の行動を非難する者がひとりでもあれば八つ裂きにされてもいい、どうか確かめて貰いたいと抗議に打って出たのである。風まかせの帆船が敗走時に2マイル先へ出ただけの落ち度で艦長を処刑して見せしめとするのは随分と乱暴な処分であり、温厚な人柄のメディナ・シドニア公には相応しからぬ過酷な命令に思えるのだが、それもそのはずでこのとき命令を下していたのは参謀役のボバディーリャであった。クエジャルの言葉によれば、総司令官のメディナ・シドニア公はイギリス艦隊との交戦で引き続く惨状に見舞われ、意気消沈して船室に閉じこもったまま悲嘆に暮れていたのである。

「この件で公爵は部屋に引きこもり、顧問官たちは自分たちの落ち度を繕うために罪もない者たちの生命と名誉を手当たり次第に不当に手にかけていた。これは誰もが周知の事実です⁵⁾。」

たしかに戦闘艦ガレアサ「サン・ロレンソ」がカレーに座礁し、花形艦であるガレオン船「サン・フェリペ」と「サン・マテオ」がフランドル沿岸で相次いで擱座して多数の死者と捕虜をだしている。総旗艦「サン・マルティン」にしても帆は裂け、策具が散乱、喫水下の貫通孔からの浸水が止まらない状態であった。したがって当のメディナ・シドニア公はこの事件をご存知がなく、かたわらのボバディーリャがすべてを取り仕切っていたのだとクエジャルは言う。ともかく懸命の抗議が認められたクエジャルは縛り首をまぬがれ、ひとまず軍司法官の座乗するレバ

ント隊の副旗艦「ラビア」へ身柄を移された。司法長官マルティン・デ・アラランダがクエジャルに関する情報を蒐集して彼の言い分に裏付けを取るためである。クエジャルに縮帆減速の命令を無視する意図はなく、どうやら気づかなかったのが事実であるらしいが、いずれにしても2艘の艦船が本隊をはるかに離れて先へ進んでいたのは誰の目にも明らかであった。しかし非難されているがごとき戦闘時における卑怯な振る舞いについては断固として身に覚えがないとクエジャルは言う。その証拠確認が難しいだけに、ぜひとも部下の兵士全員に問い糺して証言を取ってくれ言うのはもっともな主張である。

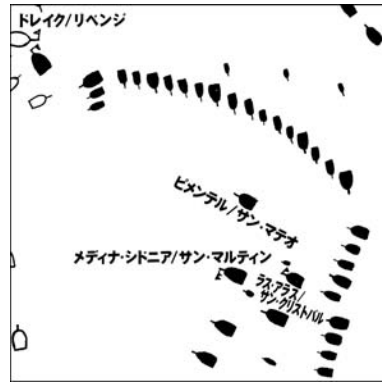
はたしてフランシスコ・デ・クエジャル艦長がいかなる人物であるかについてはほとんど知られていないが、25 エスクードの給料でスペイン艦隊に加わってリスボンを出撃したのは確かである。その時点でクエジャルの配属場所は記されていないが、コルーニャで艦隊の再編成がなされたときにガレオン船「サン・ペドロ」の艦長に任命記録されている。「サン・ペドロ」はディエゴ・フローレス・デ・バルデス指揮下のカステーリャ艦隊のガレオン船で、1584年カンタブリア建造の530トン、大砲24門、兵士184、水夫90の花形戦闘艦である。指揮官バルデスは、フェリペ2世の指令を受けてコルーニャで総旗艦「サン・マルティン」へ参謀として移乗したので、その後を受けてグレゴリオ・デ・ラス・アラス司令官が旗艦「サン・クリストバル」700トンの指揮を取るようになるのである。このカステーリャ艦隊とメディナ・シドニア公が直率するポルトガル艦隊とのふたつはスペイン艦隊の主力部隊であり、実戦時の三日月型陣形にあっては後衛の左の^つ角に配置され、最も激戦の予想されるイギリス海岸寄りを作戦航行することになる。そのカステーリャ部隊の主要花形戦闘艦「サン・ペドロ」の指揮を任されているのがフランシスコ・デ・クエジャルであることを思えば上層部から相当に篤い

信頼があったに相違ない。実際、無碍に処刑するのを司法官に思いとどまらせたについては、彼に対する周囲からの深い信頼感が根底に働いていたことは否定できないのである。

いま1艘の「サンタ・バルバラ」はファン・ゴメス・デ・メドラーナ指揮下のウルカ艦隊の船で370トン、19門、兵士26、水夫24、1559年建造のネザーラント船籍でクリストバル・デ・アビラが艦長である。ウルカは北海やバルト海沿岸を航行する小判型ないしは草鞋型の荷船ないしは運搬船を総称する呼び名であるが、戦時には大砲を搭載することもできるのでスペイン艦隊に組み込まれている。船籍の総数に数えられはするが、総体に船脚が遅くて操船も難しいうえ、食糧や工兵機材その他の必需品を満載してなおさら鈍速になるばかりか、何よりも厄介なのは風上へ航行できない欠陥をもつので艦隊全体の脚を引っ張って航進速度を落とす原因となっていた。これはリスボンを出航して間もなくにメディナ・シドニア公が「操船性の鈍いウルカは頭痛の種であります⁶⁾」と訴え、リザード岬を臨んでイギリス海峡へ入る前日にも「数艘はおそろしく船脚が遅いのであります。…足並みを揃えるしかありません」とフェリペ2世へ報告しているとおりである。どれほど船脚の早い高速船がいても、艦隊全体としてはもっとも脚の遅い船に速度を合わせなければ陣形がとれないのは見やすい道理である。したがってこの船は三日月型編成においては「サン・ペドロ」とは逆に比較的安全な前衛の右の角^つに配置され、艦隊全体の平均速度は好天順風で2ノットばかりであった。

さて、この2艘が最初の戦闘であるプリマス沖の海戦でどのあたりにいたのか確定は難しい。7月31日、まず海軍卿ハワードの旗艦「アーク・ロイヤル」麾下の艦隊がスペイン右翼先端のレバント艦隊へ攻撃をしかけるところから戦局が動き始める。レイバ座乗の戦艦商船「ラタ」が北西へ突出して大きく回り込んでこれを迎え撃ち、ベルテンドーナ指

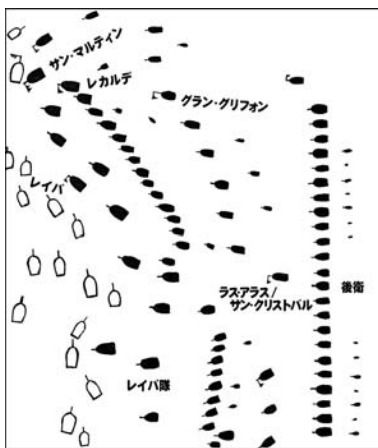
揮の「レガソーナ」も残りの艦船を後に従えて円形に陣容を整え、ハワードを待ち受けて「アーキ・ロイヤル」の行く手をさえぎる作戦に出る。左翼ではドレイクの「リベンジ」がスペイン艦隊の背後へ回り込もうとしか、イギリス沿岸とスペイン艦隊の間隙を追い風に乗ってすり抜けようと北東へ移動してくる。しかし



「リベンジ」の船首右舷前へ回り込んできたレカルデ提督の「サン・フアン・デ・ポルトガル」に行く手を牽制されて果たせなかった。そのまま乱戦となり、ドレイク艦隊に包囲されて苦戦に陥っているレカルデの旗艦を右舷前方に臨んでメディナ・シドニア公は、総旗艦「サン・マルティン」の舳先を向けて救援に駆けつけるのである。ラス・アラス艦長の「サン・クリストバル」がほぼ併走する形でぴったりと寄り添うようにつけている。背後にはカスティーリャ艦隊の16艘が整然と横並びに配置についてドレイク艦隊を目指している。旗艦に追従してこの16艘のどこかにクエジャル艦長の「サン・ペドロ」がいるはずである。少し東へ離れた海岸よりには、突出してくるイギリス艦隊の先端を牽制しているガレアサ4艘と並んでメディナ艦長の「グラン・グリフォン」が北西に舳先を向け、フランシスコ・デ・トレドのガレオン船「サン・フェリペ」も同方向へ向かっている。「グラン・グリフォン」はウルカ隊の旗艦であるからアビラ艦長の「サンタ・バルバラ」もこれに従って後ろに控えて北西へ針路を取っているはずである。この後、不幸にして「ロサリオ」の拿捕と「サン・サルバドル」の爆発事故が起こるのだが、これがプリマス沖海戦の概略である。この時点でクエジャル艦長にもア

ビラ艦長にもそれぞれの旗艦に従属して配備についており、何ら非難されるべき落ち度は見られないのである。

続く8月3日のポートランド沖の海戦になると状況は遥かに緊迫してくる。風は北東。スペイン艦隊の左翼をすり抜けて風上へ立とうと図るイギリス側はポートランド岬方向へ移動してくる。フロビッシャーの艦隊である。これを阻止すべく総旗艦「サン・マルティン」がガレアサ4艘に合流する。イギリス艦隊随一の大型船であるフロビッシャーの旗艦「トライアンフ」(1,100トン)を初めとするの他6艘を捕捉するためである。ガレアサ4艘が圧迫攻撃をかけているがそのすぐ東に浅瀬が待ち構えている。しかも東への強い潮流に流されている。イギリスは浅瀬の存在を十分に承知だが、針路海域の案内に暗いスペイン艦隊には極めて危険である。ガレアサに押されて窮地に陥っているフロビッシャーの救援に向かうハワードの「アーク・ロイヤル」麾下の艦隊へ総旗艦「サン・マルティン」、オケンドの「アナ」、レカルデの「サン・ファン・デ・ポルトガル」が回り込んで行く手を完全にさえぎる作戦にでる。風は敵に有利な向かい風である。トレドの「サン・ファン」、レイバの

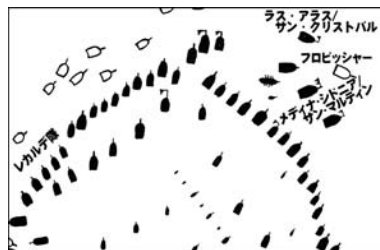


「ラタ」、メヒアの「サン・ルイス」、ベニャフィエルの「サン・マルコス」、ベルテンドーナの「レガソーナ」などの花形戦艦が突出してイギリス艦隊を包囲する。混戦状態ではあるがスペインは鉄壁の守り。背後には35艘におよぶ艦船が控えている。ハワードとドレイクがどのようにぶつかって見てもこの重厚な壁に簡単に跳ね返されてしまう。よ

ほどの戦術と戦力をもって当たらない限り自滅するばかりであるが、しかし未だこれだけ膨大な艦隊に対峙する戦術など存在しない未熟な時代であるから突破するのはまず不可能と言うべきであろう。このとき前衛には小型の荷船 24 艘がほぼ南北に櫛の歯状に並んで退避し、カステーリャ艦隊の旗艦「サン・クリストバル」がその警護についている。クエジャル艦長の「サン・ペドロ」は後衛の激戦地のどこかにいるに違いない。またウルカ隊の旗艦「グラン・グリフォン」がメディナ・シドニア公の救援に向けて舳先を転じているので、それに従う艦船の中にアビラ艦長の「サンタ・バルバラ」がいると思われる。

3.

ポートランド沖ではスペイン艦隊はまだ弓形あるいは三日月型の陣形を維持していたが、4 日のワイト島沖の戦闘ではそれがかなり崩れてほぼ円形の布陣となっていた。もっともそれはスペイン軍がワイト島への上陸を目論んでいると判断したイングランドが、これを是が非でも阻止すべくフロビッシャーの艦隊を送って沿岸よりに圧迫展開したからである。より正確にはイギリスは、スペイン艦隊がワイト島の東へ回り込んでソレント海峡からポーツマスへ突入を図り、さらにサウサンプトンへ上陸を企てる作戦を想定していたのである。これより先の 1588 年 5 月にイギリス枢密院はスペイン軍の上陸地点をいくつか慎重に検討している。スペイン軍がどこへ第一歩を降ろすのかの判断は、イギリスにとっては死活を分ける最重要の問題であり頭痛の種であったのは言うまでもあるまい。次の 3 点が考えられた。



- 1) どの地点がもっとも抵抗が少なく、穏やかに上陸できるか。
- 2) ガレー船に適した港はどこか、そしてスペイン、フランス、フランドルから迅速に補給出来る港はどこか。
- 3) 侵略によって王国にもっとも打撃をあたえる位置はどこか、そして軍勢を駐留させることによって女王陛下に防戦を余儀なくさせるのはどこであるか。

1) に関しては王国のいずれの地点にしても、海岸の守備隊は近隣の援護を得て敵を悩ませ、あるいは戦闘によって上陸を阻止し、敵を退却させるか甚大な被害を与えることになるだろう。したがってどの地点であってもスペイン軍が容易に上陸して塹壕に身を隠せるとは思えない。新規の兵員の補充と十分な補給を行って油断なく配置についていれば、主力部隊が向かってこない限り、僅かな兵員でもって上陸を阻止することはさほど難しくないはずである。2) についてスペイン、フランドル、フランスから偏らずに迅速に補給できるのはワイト島、ポーツマス、サウサンプトンしか考えられない。しかしポーツマスとサウサンプトンの警備態勢はワイト島の比較にならないほど強固であるのは知られている。だとすれば敵はワイト島上陸を狙ってくる可能性の方がおおきいだろう。

「ワイト島への上陸しか考えられない。ワイト島には4つに分けて8000名が駐屯しているが、これだけでは撃退できるはずがないので敵は容易に上陸するだろう。またたくうちに敵は兵力を固めてその地点ならびにわれわれの補給物資を運ぶに適し、自然の要塞が3カ所ある地域を占拠してガレー船の安全を確保して内陸へ侵攻するであろう。そし救援に駆けつける女王陛下の艦船入港を風の利を得て阻むだろう⁸⁾。」

しかるにイギリスがこのように考え出した極めて穏当とも言える戦略想定は、フェリペ2世の机上の作戦には入っていなかったのである。エスコリアル執務室でフェリペ2世がひねり出した戦略は、まずまっすぐイギリス海峡を登ってマーゲート岬へ達する。そこで王の指令通り、パルマ公のフランドル陸軍 18,000 と合流して渡海の安全性を確保することであった。海峡途中にイギリス海軍がいてもこちらから攻撃を仕掛けてはならない。ハワードやドレイクが小賢しくも攻撃してくれば、こちらが圧倒的優勢であるから簡単に蹴散らすことができる。ただしこちらから先に手出しをして戦力と時間を無駄にすることは厳禁である。戦闘による消耗は極力避け、フランドル軍の渡峡上陸に全勢力をそそぐよう努力すべし。メディナ・シドニア公をプリマス攻撃へ踏み切らせなかったのもフェリペ2世のこの指令が大きな足枷となっていたからである。しかしフェリペ2世がワイト島にまったく興味を示さなかったのかというところでもない。指令書に述べている。

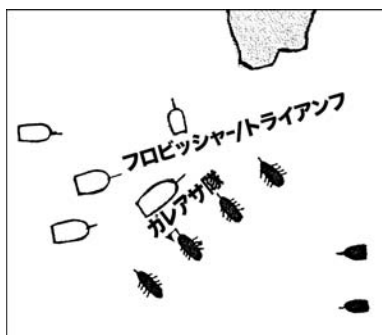
「パルマ公がイギリスへ渡峡できず、貴殿がその援助も出来ない場合は、それほど強固ではないので、ワイト島を占拠出来るかどうかやってみるべし。これを占拠出来ればそこを防衛地として艦隊が碇泊できる安全な港となるだろう。重要な地点であるからそこから道が開けるよう努力し、充分な城塞を築くのがよろしい。その場合、港の東から入るのがよろしい。西よりも広い入り口である。ただしこれを実行するのは他に手段のない場合に限る。しかも遠征の意図が果たせなくてマーゲート岬から帰還するときのことである。往路ではけっして行ってはならない。また遠征の主作戦を万全の構えで試みた後でなければならない。ワイト島が確保できればパルマ公と連絡を取ってお互いの勢力と名誉にかけ、共通の目的に向けて状況に応じた相互援助の努力をされたい⁹⁾。」

フェリペ2世の能天気とも言えるこの指令は、スペイン艦隊総司令官メディナ・シドニア公にとっては酷である。降りかかる火の粉を払うのはよろしいが、目前のネズミー匹にも跳びかかってはならないとスペインの獅子に命じている。現勢力を維持したままパルマ公と合流せよというのが至上命令である。6,000 から 10,000 の兵士を無傷のまま温存して運び、フランドル軍 18,000 と合流し、イングランドへ上陸させて一挙にロンドンを制圧することに作戦の主眼がおかれているからである。ワイト島進撃はすべての遠征作戦が失敗したあと、帰路において余力をもって試みるのはよろしいとフェリペ2世は言う。そこに停泊地を求めてフランドル軍との合流作戦を練り直し、再起を喫って屈辱を果たす栄誉は両将の作戦にまかせる。しかし往路においてはくれぐれもワイト島の攻撃占拠に勢力と時間を割いてはならないと言うのである。フランドル軍のイングランド上陸にすべてを賭けているフェリペ2世にしてみれば、スペイン遠征艦隊はイギリスを征服するための戦闘部隊ではなかった。むしろ兵員の輸送船団にすぎないのである。ここを取り違えてはいけない。補充部隊を無事にパルマ公へ届けばメディナ・シドニア公艦隊の主要任務は終わるのである。しかし実際に 130 艘の艦隊を統帥しているメディナ・シドニア公にしてみれば、艦隊の背後を保証できる安全な停泊避難港がければ不安でならない。それにはワイト島が最適である。喉から手が出るほど欲しい。事実、ワイト島から先のヘイスティンクスを経てドーバーからマーゲイト岬へ至るまでのダウンズ沿岸には、スペイン艦隊を収容できる余裕のある港湾がないのである。それを考慮してメディナ・シドニア公は、パルマ公の動向が十分に把握できるまではワイト島から先へ艦隊を進める危険は犯したくないとフェリペ2世へ記している。しかしフェリペ2世の意図は至上命令であった。つまりワ

イト島の先へ艦隊を進めてしまったのである。

4.

すでに述べたようにワイト島が作戦上の重要地点であることはもちろんイギリス側も心得ている。しかも守備隊の弱点をも承知のイギリス艦隊は、船脚の早さと操船性の優位を駆使して遠くからカルバリン砲を撃ちかけては離れて行く作戦でスペイン艦隊のワイト島接近を阻む。一方、得意の白兵戦へ持ち込むことのできないスペイン艦隊は、業を煮やして罠をしかける。右翼にウルカ「サンタ・アナ」、中央にガレオン船「サン・ルイス」、左翼にウルカ「ドンセジャ」の三艘が本隊からわざと遅れておとりになる作戦である。すでにガレアサ3艘はワイト島寄り左翼のフロビッシャー艦隊を放棄して右翼の先端へ移り、レイバ隊の「ラタ」の前に出て援護を固めている。ホーキンズの「ビクトリー」がおとりの「サンタ・アナ」を狙って食いついてくるのを捕獲する作戦である。ドレイクの「リベンジ」をおびき寄せるおとり船「ドンセジャ」にはレカルデ麾下のビスケー隊が、そして同じく中央でハワードの旗艦「アーク・ロイヤル」を誘う「サン・ルイス」にはトレドの「サン・フェリペ」、ピメンテルの「サン・マテオ」の強力艦がその動きを見守っている。しかし敵は誘いに乗ってこなかった。接近戦に持ち込もうとすると敵は船脚の早さを生かして身軽に風上へ反転して逃げ去るのである。スペイン艦隊で最も脚のはやい「サン・ファン・パウティスタ」が追跡するが、それでもまるで錨をひきずっているかのように遅く感じられる。メディナ・シドニア公をして「これではどうにもならない」と慨嘆せしめた。それほどイギリス艦船の脚は軽快だったのである。後衛ではおとり作戦でイギリス艦隊が釘付けになっており、イギリス海岸寄りではフロビッシャーの「トライアンフ」が相変わらず風上へ抜けて東へ出よう

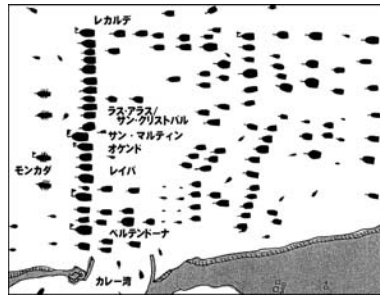


としているが果たせないでいる。同時にそれがスペイン艦隊がワイト島へ接近するのを阻む効果をあげていた。右翼・前衛はイギリス艦船から攻撃される危険はまったくないが、それでも総旗艦には戦闘艦ガレアサの「ナポリターナ」が併走しており、総旗艦の右舷から南方、フランス沿

岸方向にはオケンドのギブスコア艦隊が陣営をしっかりと固めている。

南東の風が吹かなければソレント海峡へ入ることはできないのだが、神はスペインに味方しなかった。潮の流れも逆であった。結局、スペイン艦隊がワイト島に投錨停泊する余裕はなかった。逆に言えば、イギリス艦隊は敵がワイト島へ接近するのを阻止できたことになり、最大の危機はひとまず去ったわけである。風向きと潮流に恵まれずワイト島への上陸機会を失ったスペイン艦隊の前衛は、総旗艦「サン・マルティン」を先頭にひたすらダンケルクのバルマ公との合流を目指して北東へ針路を取って航進することになるのである。このとき問題のカスティージャ艦隊の旗艦「サン・クリストバル」は総旗艦の左舷から北西へ並んで同じく北東へ針路を維持している。他に点在している艦船が無いところを思えば、この陣列にクエジャルの「サン・ペドロ」もいて作戦行動に参加しているのは間違いない。おとり作戦を行っている後衛とダンケルクを目指す前衛との間に挟まれるような格好でウルカ艦隊の「グラン・グリフォン」がいる。戦闘時にあってみだりと戦列を離れるのは、動きの鈍い運搬船にとって命取りとなることを考えれば、アビラ艦長の運搬船「サンタ・バルバラ」はもっとも安全なこのあたりの位置に含まれてははずである。「サン・ペドロ」も「サンタ・バルバラ」も戦列を離れ

て陣形の外へ出ればすなわち目前の敵から集中攻撃を受ける危険性にさらされるわけで、これまでの戦況の移り変わりの限りでは、それぞれ随時、旗艦の動きにしたがって追従して移動しているのがわかるのである。



8月6日の土曜日、午後4時にカレー沖へ達し、投錨停泊の命令が出たのは5時。翌7日の深夜に火船攻撃があった。カレー沖に停泊したとき、スペイン艦隊は西へ回頭してカレー湾口から北へ横陣列でイギリス艦隊に対峙停泊した。最も陸地寄りにベルテンドーナの「レガソーナ」、続いてレイバの「ラタ」、総旗艦「サン・マルティン」は中央、その左舷にはオケンドの「アナ」、右舷には「サン・マテオ」、「サン・ファン・デ・シシリア」などの花形戦艦22艘が最前列にずらりと並んで金城鉄壁の偉容を誇る。その前列にガレアサ4艘が横並びに配備されている。背後にウルカなどの運搬船が安全な位置に錨を降ろしている。カスティーリャ艦隊の旗艦「サン・クリストバル」はポルトガル艦隊ペニャフィエル侯の「サン・マルコス」を挟んで総旗艦の右隣に投錨している。旗艦の定位置である。とすればクエジャルの「サン・ペドロ」も背後のどこかに停泊していると思われる。完璧な防御の陣容であり、整然たる眺めであるがイギリス艦隊にとってはこれが驚異の陣形であった。まるでカレー沖洋上にひとつの要塞都市が出現したような壮大さである。この編成を崩すには火船攻撃しかないとイギリスは考えたのだが、その作戦が見事に効を奏したありさまは別稿に述べた。錨策を切断して火船を回避したスペイン艦隊は四散してダンケルク方向へ流されていった。このときの混乱期にあって各艦船の動きを追うのは不可能だし、それぞれの判断で危機を回避するよう指令さ

れたのだからその行動を非難するのは正しくない。問題は翌日の夜明け、グラブリーヌ沖の戦闘である。イギリス艦隊ハワード海軍卿が驚嘆したごとく、スペイン艦隊は捨錨逃避でかろうじて危機を回避して四散したにもかかわらず、夜明けにはすでに鉄壁の三日月型編成にまとまりつつあったのである。その操船技術の見事さにはイギリス艦隊にとうていまねのできないものがあるとハワードも認めている。

この時の戦闘でドレイクとメディナ・シドニア公が激戦を交え、ドレイク捕虜の虚報が伝わったことは先に述べた。総旗艦「サン・マルティン」がドレイク艦隊に包囲されたとき、まず救援に駆けつけたのがガレオン船「サン・マルコス」であった。それから12艘ほどが駆けつける。レイバの「ラタ」、オケンドの「アナ」がいた。例のカスティリーヤ艦隊の旗艦「サン・クリストバル」も「サン・マルティン」の右舷から乗り入れて戦闘隊形を固めている。この時、クエジャル艦長の「サン・ペドロ」は旗艦「サン・クリストバル」から北へ5艘ほど離れた位置でウインター卿の艦隊「バンガード」と対峙していた。フロビッシャーの艦隊が間近だし、ハワードに合流してきたシーモア卿の艦隊「レインボー」も目前である。この戦況では明らかにどう見ても「サン・ペドロ」は戦闘の中心部にいる。艦長の義務放棄とか戦線離脱を訴えられるとはまず考えられない位置である。立派に戦ってきたと主張するクエジャルの言い分に理があると言えるだろう。その北にウルカ隊の旗艦「グラン・グリフォン」の姿は望めるが、今ひとつの問題船であるアビラ艦長の「サンタ・バルバラ」の位置がつかめない。基本的に運搬船であるから足手まといを避けて安全な後方へ退いているとも考えられる。そうであるなら荷物船としては妥当な行動であろう。

5.

グラブリーヌの戦闘は午後遅くの突風に襲われて自ずと停止となった。強い潮流と北西の逆風のためスペイン艦隊はイギリス艦船を追撃できないのである。スペイン艦隊の死傷者は600、負傷者800であった。初めに述べたゼーラントの浅瀬の危機を脱したスペイン艦隊は北海へ向かう。これを追尾するイギリス艦隊には弾薬が払底していたがスペイン側は知るよしもなかった。翌10日、水曜日、イギリス艦隊がレカルデの後衛へ迫ってきたので総司令官メディナ・シドニア公は総旗艦を回してレカルデに合流、そして帆を絞って戦闘配置を指令した。弾薬のないイギリス艦隊は一発の交戦もなく離れていった。このとき「サン・ペドロ」と「サンタ・バルバラ」が減速の命令に従わずに先へ出た違反に問われ、しかもグラブリーヌ海戦で総旗艦を援助せず、また戦闘にも加わらなかった咎により死刑の判決を受けたのである。寝耳に水の判決にクエジャルは憤然と反発した。上告が認められ、軍事司法官マルティン・デ・アラランダの座乗するレバント艦隊の副旗艦「ラビア」に移されて留め置かれ、その間にクエジャルに関する情報が集められた。調査の結果は上に述べてきた事実の域を出るものではなかった。おびたしい敵弾を受けて浸水が激しく、船体や策具の補修・修理のために時間を必要としたのは、すなわち「サン・ペドロ」が旗艦に従属して常に戦闘区域にあったことを物語っている。クエジャルの行動に兎の毛で突いたほどの落ち度も見出せず、多数の戦死者と負傷者を出しながらも国王陛下に立派に奉仕してきた臣下であると認められたのである。無碍に処刑していい人物ではないと判断した司法官アラランダは、刑の執行に際して艦隊総司令官メディナ・シドニア公の同意書を求めたのだった。婉曲に処刑の再考を促したわけだが、その返書にはクエジャル処刑を中止する旨が記してあった。ただし「サンタ・バルバラ」のアビラ艦長は容赦なく処刑するよ

うにとのことであった。クエジャルが後にフランドルから知人に認めた^{したた}手紙にあるように、激戦のあとメディナ・シドニア公が船室に閉じこもってしまったのでこの事件が耳に届かず、参謀ボバディーリャがすべてを取り仕切っていたと言うのが真実であるらしく、それがもとでこのような行き違いが生じたのかも知れない。あるいは疲弊困憊したメディナ・シドニア公にもクエジャルの処刑を中止するだけの理性がまだ残っていたと見ることもできよう。いずれにしてもこれでクエジャル処刑の危機は去ったが、なぜアビラ艦長だけが容赦なく処刑されたのかについて明確に知ることができない。しかも驚くべき事に、部下をひとり絞首刑にして艦隊に恐怖が走ったにもかかわらずメディナ・シドニア公の航海日誌はこの件についてひとことも触れていないのである。メディナ・シドニア公が知らなかったとすればそれも有り得るだろう。常にかたわらにいたバネガス艦長の日誌にはかろうじて「11日、木曜日にパタチェの帆桁に吊された。ある艦長は任務を解かれた¹⁰⁾。」とのみ記されている。名前すら記されていないが、パタチェ（二檣船）の帆桁に吊され、見せしめのために艦隊を巡って晒し者となったのはアビラ艦長に間違いない。任務を解かれた艦長がクエジャルであることは言うまでもあるまい。ウルカ隊の副旗艦「サン・サルバドール」で克明な記録をつけていたココ・カルデロンにしても「この日、メディナ・シドニア公は商船「サンタ・バルバラ」の艦長アビラを絞首刑にした。そして他の船の艦長を下士官に格下げしてガレオン船へ送った。戦闘の時に彼らは戦場を離脱した罪だと聞く¹¹⁾。」とのみ傍観者の立場から簡潔に書き留めるだけである。誰もがあまり触れたがらない事件であったことは確かなようで、それだけに真相が突き止められなくなってしまっている。

6.

クエジャルの苦難はまだ続く。司法官ミランダの座乗する「ガレオン船へ送った」とココ・カルデロンが記しているのは間違いで、実際にはレバント艦隊の副旗艦「ラビア」で武装商船である。ガレオン船のような戦闘艦ではなかった。艦長はマルティン・デ・アランダ。クエジャルは司法官の機転で処刑はまぬがれたものの「サン・ペドロ」艦長の任を解かれて「ラビア」へ移乗したままになっている。戦闘は終わり、あとはスペインへの帰還航路をたどるばかりである。このまま北海を北北東へ北緯 61 度 30 分までのぼり、そこから西南西へシェトランドを回航して北緯 58 度まで進み、南西へ北緯 53 度まで下るのである。それから南南西へフィニステレ岬を目指せばコルーニャへ到達するはずである。海図によれば確かにそのとおりだが、風向きだけを頼りに荒海 3600 キロの航程を乗り切るのは熟練した船乗りにとっても生やさしい業ではなかった。ましてや、にわか仕立ての水夫が多いうえに水と食糧を極端に切りつめ、飢えと病気に苦しみ、浸水と戦いながら未知の海域へ乗り入れるのである。艦船数と人員をほぼ半数に減らし、幽霊船のようになってスペイン沿岸へたどり着いた惨状の経緯については別の稿で述べたので、ここではクエジャルの運命だけに絞る。

北緯 54 度半までたどり着いた「ラビア」は、南からの逆風を受けてアイルランドの岬を回りきれず、高波に抗しきれなくなってスライゴから北西に 20 キロばかりのドネゴール湾に難を避けて天候の回復を待った。海岸から 2 キロの地点で 4 日の間、為す術もなく荒波に揉まれ、悪天候は回復するどころか 5 日めには嵐となった。黒々と点在して、砕け散る波を霧のように噴き上げている岩礁のあいだを縫って、わずかに覗く砂浜へ乗り入れようと奮闘したがこれは至難の業であった。帆は破れ、策具はずたずたとなった「ラビア」は 2 艘の僚艦もろとも海底に乗り上

げてしまった。座礁した「ラビア」のかたわらでくの字に折れ曲がって動けなくなっている「サン・ファン・デ・シシリア¹²⁾」の甲板を高波が洗う。頭を越す波がいずれは船を微塵に砕くのは時間の問題である。恐慌をきたした艦長ディエゴ・エンリケスは甲板にあった短艇^{ボート}に目をつけ、ビリャフランカ公爵の子息とポルトガルの騎士ふたりを誘ってそれに乗り込むと入口の揚げ戸を閉じて目張りをするように命じたのだった。宝石と金貨を積み込むことを忘れなかったが、そんな物は何の役にも立たなかった。と言うのも海面におろされた短艇はたちまち大波に吞まれ、亀の子のようにひっくり返ってしまったからである。一日半の間そのまま波間に翻弄されたあげく赤い腹を上に向けて陸地に打ち上げられた。アイルランドの原住民がそれに群がり、甲板を引き破って4人の溺死体をひきずりだすと宝石やお金をむしり取り、裸に剥いてその場に放り出したのだった。ほかにも水へ飛び込んでそのまま浮き上がらない者、樽や破片にすがって波浪に漂い、やがて力尽きて沈んでいく者。陸地では疲弊して砂浜にたどり着いたスペイン人を原住民が容赦なく殺戮しては掠奪を欲しいままにしている。クエジャルはその壮絶な光景を船尾の高見から為す術もなく目撃していたと言う。

泳ぎを知らないクエジャルは最後まで逃げ遅れ、水夫や士官はすでにほとんど死んでしまっていた。船が微塵に砕けるのにあと数分と迫ったとき、司法官ミランダは逃げ遅れた船尾でひとり絶望に打ち拉がれていた。クエジャルにしてみれば命の恩人とも言うべき老齢の司法官ミランダをそのまま見捨てるに忍びなく、老体を太い鎖で船の破片につなぎ、自分も別の板切れにすぎると意を決して共に荒海に身を投じたのだった。胴着とズボンにエスクード金貨をふんだんに縫い込んでいたミランダは、その重みで沈みかけてしたたかに海水を飲む。大きなテーブルほどもある揚げ戸が折よく手近へ来たのでこれに司法官を押し上げようとしたけ

れど、巨大な高波をかぶって果たせず、ついに力尽きたミランダを救うことができなかった。大声に神の名を呼んでいたがそのまま沈んでしまったと言う。身軽なクエジャルだけは別の板切れに這い登り、そのまま波に運ばれて海岸へたどり着いたのだった。これで助かったのではなかった。陸地では原住民とイギリス兵が身ぐるみを剥ごうと待ち構えているのである。しかし全身血まみれのクエジャルを見て幸い誰も近寄ろうとはしなかった。原住民に棍棒で殴り殺されるか、敵兵に串刺しにされるのだけはまぬがれたのである。浜辺に累々と見捨てられた 600 以上の死体は、やがてカラスがついばみ狼が貪り喰うまとなるだろう。隙を見て陸地へ入り込んだクエジャルは、ずぶぬれのまま飢えと苦痛で崩れそうになりながら枯れ草の中に一夜を過ごし、頼るべき修道院を求めて歩き始めたのは、弘暁の薄明かりが樹木の葉裏を白く染める頃だった。ようやくたどり当てた教会は荒涼として人気が無く、油でもかけたのだろうか、崩れた白壁の一部は黒々と煙の跡を残している。ほとんど全壊である。前庭に転がったキリスト像には矢がプツプツと突き立っている。手足をもがれたマリア像が黒こげと化しているのもいたわしい。裏側へ回ってみると教会の鉄柵へ貼り付けるようにして人が吊されている。クエジャルよりも先にここへたどり着いた者達がいたのである。あきらかにスペイン人であった。兵士か水夫なのか、身分も階級もわからない。すべて赤裸に剥かれた 12 人が横並びにくびれてぶら下がっていた。難破から逃れたスペイン人をひとりたりとも生かしておくまいとするイギリス人プロテスタントの手にかかった犠牲者であった。カトリック修道士も捕まればおなじ運命が待っているので難を避けて山へ逃げ込んでしまっている。破戒された教会や修道院は牛舎や豚小屋と化していた。

7.

このあとも殺戮を逃れ、飢えと渇きに耐えながら逃亡を続けるうち、エリザベス女王の命令には従わず、異端であるプロテスタントに敵対してイングランドと闘うひとびとのいる村へたどり着いた。スペイン人に好意的なこの村に伝わった情報では、ローグローズ・モア湾にスペイン船が投錨しているとのことであった。この船が「サンタ・アナ公爵夫人」、900トン、23門、兵280、水夫77のアンダルシア艦隊のウルカ（運搬船）であったことが判明している。追い風に乗ってスコットランドを目指していたのだが、嵐に巻き込まれて逆方向のエリス岬まで流されてしまった。そこから強い潮流と深い霧、強風に運ばれてもと来た方向へ流され、ロッサン岬を北へ回ってローグローズ・モア湾へ投錨したのである。狭くて岩礁だらけの危険な場所であったが全員が岸へたどりついていた。この知らせに勇気を得たクエジャルたちは、時を移さず、この船がいる湾を目指して飛び立つ思いで出発した。道中、クエジャルは負傷した足の痛みには耐えきれず仲間から遅れてしまい、港へたどりついたときには船は補修を終えて出航したあとだった。しかし取り残されたクエジャルにとっては、むしろ神の恵みであり救済でもあった。と言うのがメインマストも索具もぼろぼろになりながらも幸運を得て入港してきたこの船は、二日後には帆を張って出帆したのだが、沿岸を横切ろうとした時点で200人以上を乗せたまま沈没してしまったからである。泳ぎ着いた者はイギリス人が捕まえてぜんぶ刺し殺してしまった。概算で1000名あまりがアイルランドで殺害されたが、クエジャルは虐殺をまぬがれた数少ない生き残り証人となったのである。

クエジャルの目から見た原住民の生活習慣、悪癖、盗癖などは余の事として、イングランドに敵対して城塞を固め、エリザベス女王に爪の先ほども従わない領主がいた。スペインが異端のエリザベスに敵対する強

大な国であるを知って暖かく迎え入れてくれたのである。スペイン人たちを自分たちの仲間として鄭重に扱ってくれるのでこれまでの艱難辛苦にくらべれば至福の時であった。クエジャルは3ヶ月の間、原住民のようになって暮らすことができた。しかしやがてはスペイン人を匿っていることがダブリンの総督フィッツウイリアムの耳に届きイギリス兵 170 人ばかりが派遣されてくる事態となった。クエジャルのように難破して三々五々アイルランドの土地をさまよっているスペイン人をことごとく捕らえては即刻処刑を命じたコノート総督ビンガムが、エリザベス女王の手間を省いて差し上げたとばかりに得意げに報告する。

「優雅にして畏怖すべき君主：…まず海峡にて女王陛下の海軍に打ち負かされ、それ以来、全能の神の手が下ってわが王国の沿岸に無惨に難破しましたが、そのほとんどが当地コノートの小湾であります。小生、ディプティ卿の指揮のもとに女王陛下に奉仕致しておりますこととお喜び下さい。当地の各場所で少なくとも 12 艘が沈み、そのすべてを把握しております。2, 3 艘は島の外海で沈んだと想定されます。わが剣にかけた 1, 100 名ばかりを除いて乗員はすべて溺死。そのなかには隊長、艦長、副提督、旗手その他の下士官や若い貴族など身分の高い人物も含まれておりました。その数は 50 名ばかり¹³⁾。」

ダブリン総督フィッツウイリアムも女王陛下に次のように認める。

「上陸した者 300 名を越えず、しかも 1 艘の船も残っていないようです。神のおかげで彼らは岩礁のうえですぶぬれですので、私は神の兵士となってそこに残っている屑どもを処理いたしましょう¹⁴⁾。」

「残っている屑」の処理にダブリン総督は兵士 1800 を派遣して攻撃を仕掛けてきた。クエジャルたちは原住民に協力して要塞を強固に仕立て、鉄壁の守りを構えて籠城に備えた。水も食糧も豊富にあり、充分な戦略のもとに包囲に備えた要塞は、敵の如何なる脅しも威嚇も効果のないまま 2 週間が経ち、悪天候と豪雪のせいでイギリス兵は幕舎をたたんで引き上げざるをえなくなった。おかげで原住民もクエジャルたちも異教徒の手から救われたのである。勇敢なクエジャルたちを手元に引き留めて置きたい領主の意向に添うことは出来ないので、ある夜、仲間 4 人とひそかに要塞を抜け出し、スコットランドへ渡る船の情報を求めて海岸を目指した。1588 年の降誕祭から 10 日後の朝だった。イギリス兵の目を避けて歩くこと 20 日、アイルランド北部沿岸のジャイアント・コーストへ痛む脚をひきずってたどり着いた。そこはガレアサ「ヒローナ」が座礁して 300 人が溺死した場所である。死者のなかにはフェリペ 2 世から絶大な信任を得ていたミラノ軽騎兵総司令官アロンソ・デ・レイバも含まれていた。ところが無情にも船は 2 日前にでたあとだった。ナイフで刺された足の痛みがひどくて動けなくなり、仲間はクエジャルを置いてスコットランドへの船を求めて先へ行ってしまった。

ひとり残されて滞在している村にイギリス兵が押し寄せてこれを占拠し、逃げ遅れたクエジャルはタブリンへ連れて行かれると決まった。タブリンには主立ったスペイン人が多数捕虜になって身代金の交渉成立を待っていると言う。そんな話は信用できないし、身代金のあてもないクエジャルは身の危険を感じて隙を見て柵を越え、鬱蒼とした草むらへ逃げ込んだのだった。イギリス兵が血眼になって行方を捜しているのをしり目に、そこから 6 レグワの城へ向かった。カトリック司祭が原住民に姿を変えて身を隠しているとの情報を得ていたのである。着いてみるとスコットランドへ渡るスペイン人が 12 名も身を潜めていた。そこに一

週間滞在しているあいだクエジャルは鄭重にもてなされ、ミサにもあずかったのである。その一方でスコットランドまで2日にわたる船旅の準備が万端整えられ、ついに総勢18人がぼろ船に乗って海へでたのだった。しかし夜中に逆風で押し戻され、陸地で夜明けを迎える次第であった。帆はぼろぼろ、船は沈没寸前。好天を待って再度出航したのが2日後、それから3日を経て半ば沈みながらもようやくスコットランドへ到着した。スコットランドへ着けばなんとかなる、衣服が支給され、スペインへ行く船を仕立ててくれるとそう聞いていたが事実はまったく逆であった。スコットランド王はびた一文恵むどころか600人のスペイン人を困窮のままに放置し、クエジャルたちは半年以上も裸同然でほうっておかれたのである。

「スコットランド国王は王に相応しい權威もなにも持たず、女王の命令が無ければ一歩たりとも動けず、口ひとつ開くことができないのです。」

むしろクエジャルは、スペイン人を引き渡すようエリザベス女王から厳しい要求があったのではないかと想像している。捕虜が土地の反乱者と結託するのを防ぐためとの表向きの理由はともかく、ありようはイングランドからの駐留軍の経費を省くためにスペイン人捕虜を容赦なく殺していったビンガムの所業を見れば、この想像はあながち間違いではなかったと言える。したがってもし無力なプロテスタント国王を退位させてスペイン国王フェリペ2世を王位に戴き、荒廃したカトリック教会を建て直したいと願っている貴族たちの保護と取りなしがなければ、クエジャルたちは早々にイギリスへ引き渡されてしまっていたかも知れないのである。スコットランドのスペイン人捕虜たちがプロテスタントの迫害にさらされ、窮乏に耐え、命を脅かされている実情がパルマ公へ伝わ

り、やがて食糧を搭載した船4艘に乗せてフランドルへ運ぶ手配がなされた。しかしイングランドの通行証を所持していても安心がならない。スペインの敵であるオランダとゼーラントの船がダンケルクの浅瀬で彼らを待ち受けているに違いないのである。もちろんイングランドもそれを承知である。事実、オランダはダンケルクでひと月半以上も網を張って待ち構えていたのだった。オランダの艦船に追われた4艘のうち2艘がかりうじて逃げのび、陸地に乗り上げて大破してしまった。猛烈な砲撃と銃撃による攻撃のなか、泳ぎを知らぬクエジャルはまたしても海にとびこみ、板切れにつかまって陸地を目指してやっと陸地にあがり助けられたのだった。ダンケルクで捕まったスペイン人270名がオランダ人に八つ裂きにされる光景を目の当たりにしながらも、これでやっとクエジャルの苦難が終わったのである。

冬の冷たい海水、岬々たる岸壁、逃げるまもなく乗員を乗せたまま沈んでしまう船。そそり立つ岸壁が険しくて岸にたどり着けず、あるいは登れずにそのまま死体となって波間に漂った。たとえ上陸できてもひとの住めない場所であったり、飢えと寒さで死んだり、持ち物を狙う住民から襲われたりした。想像を絶するさまざまな苦難と冒険を経て九死に一生を得たクエジャルが、少しでも穏やかな気持ちで筆を執ったのはそれから1年の後であった。

「私の生存に関して定かではありますまいゆえ、あなたはこの手紙にさぞ驚かれましょう。私の生存をはっきりさせるためこれを認めますが、リスボンからイングランドへ向けて艦隊が出港して以来、わたしの身に起こった艱難辛苦と不運のゆえに、幸いわれらの主が広大無辺の御意志でそれから解放していただきましたが、幾分長い手紙になるだけの理由があるのです。一年以上も筆を執らなかったのはその機会がなかったか

らです。」

かなりの詳細を省いたが、クエジャルはまるでひとつの騎士道小説の主人公のような苦難と波瀾に満ちた体験を経てやっとアンバーレスに安住の地を得たのである。そのほぼ1年後に自分の生存を知らせるべく友人宛に綴った書簡が貴重な記録の詳細を残してくれている。今となっては帰還船舶、戦死者、帰還者の正確な数の把握はほとんど不可能となっているので正確な算出は難しいが、大づかみにすると7月22日にコルーニャを出港した当時は130艘、人員25,696名であったのが、9月から10月にかけてスペインへ帰還した時はそのほぼ半数にあたる65艘、生存者13,399名だった。したがって死亡者は水夫、兵士を合わせて12,297と概算される。未帰還の船でアイルランド沿岸で沈んだと確認できているのが17艘、あとは行方不明。溺死者は5,329あまりと推定されている。命からがら陸地へたどり着きながら原住民やイギリス兵から無慈悲に惨殺された者の数は、ビンガムの報告などから累計すると1,500を越えるようである。純粹に戦闘で命を落とした者がやはり1,500名として、残りはチフス、壊血病、風邪などで病死した者たちである。生存者数のなかには、クエジャルのように九死に一生を得てスペインへ生還できた600人ほどが含まれるはずである。こうしてみるともっとも被害が大きかったのはイギリス軍との戦闘による戦死者よりも、帰路のアイルランド沿岸で難破沈没した溺死者であることがわかる。スペイン国家の威信を賭けたイギリス遠征艦隊の末路は戦わずして海の藻屑と消えていった将兵達の数に象徴されていると言えるだろう。

注

文中の図表は Peter Pierson, *Commander of the Armada*, Yale University Press に掲載のもの

に手を加えた。

- 1) 海軍卿（ハワード）からフランシス・ウォルシンガムへ、1588. 7 月 29 日。
The Great Enterprise, The History of the Spanish Armada, Stephwen Usherwoods, Bell & Hymn, London, 1987
- 2) ハワードからウォルシンガムへ、8/9 p. 91 *Relating to The Defeat of The Spanish Armada*, Anno 1588 John Knox Laughton, M. A., R. N. ed. Temple Smith for the Navy Records Society, 1987
- 3) ドレイクからウォルシンガムへ、7 月 29 日。 *ibid.* Stephwen Usherwoods, Bell & Hymn, London, 1987
- 4) 8 月 15 日にリザード岬へ到着してより、Luis de Miranda による艦隊の状況報告。 *La Armada invencible por el capitan de navio, tomo I*, Cesareo Fernandez Duro, Madrid, 1885.
- 5) 以降のクエジャルの言葉はすべて彼の書簡による。これは 1589 年 10 月 4 日にアンベルスで認められ、1897 年にイギリスで印刷されたものである。本稿では *La Armada Invencible por el capitan de navio, tomo II*. Cesareo Fernando de Duro から「イギリス遠征艦隊の一員の書簡と報告」を利用した。
- 6) *Ibid, tomo I*, 117.
- 7) 「メディナ・シドニア公からフェリペ 2 世へ、1588. 7. 20 (7/30)」 *Ibid*, Stephwen Usherwoods, Bell & Hymn, London, 1987
- 8) 1588 年 5 月、枢密院記録。 *Ibid*, Stephwen Usherwoods, Bell & Hymn, London, 1987.
- 9) 「極秘指令書」 *Ibid, tomo II*, Cesareo Fernandez Duro, Madrid, 1885.
- 10) *Ibid, tomo II*, 「1588 年のイギリス遠征で陛下の艦隊に起こった事柄の報告。総司令官はメディナ・シドニア公。コルーニャ出港から帰還まで。総旗艦アロンソ・バネガス艦長筆。」
- 11) 「リスボンを出てより強風を避けてコルーニャに入港し、ここを出港して以来のメディナ・シドニア公指揮下の王室艦隊に起こった事柄に関して、事務長ペドロ・ココ・カルデロンによる報告。9. 24」 *Letters and State Papers, VOL. IV*
- 12) この艦船は「フリアナ」であったとの説があるが、目撃者クエジャルが艦長名をディエゴ・デ・エンリケスと明記しているのを信頼するなら「サン・ファン・デ・シシリア」でなければならない。
- 13) 「ピンガムから女王陛下へ、12/3」
- 14) 「フィッツウィリアムからウォルシンガムへ、ダブリン、10/28」